
キラキラレクイエム

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラキラレクイエム

【Nコード】

N8932R

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

暗い海を大きな豪華客船が星の世界へ旅立つ。大人たちはこの旅の意味を知っている。子どもたちは綺麗な星々に無邪気に喜んでいく。星の世界を旅する乗客たちはそれぞれの下りるべき宇宙島に下りていく。船が最後に行くべき場所へ。

その1 旅立ち

真っ暗な海を大きな船が旅立ちます。

大きな、世界一の豪華客船です。

船は真っ暗な中、大きな波に乗り、宙へ、飛び出します。

そして船は、そのまま高い高い空へ上っていき、やがて、地球の外までも飛び出してしまいます。

真っ暗だった辺りは、後ろから真っ青なライトに照らされ、振り返れば、美しい地球が輝いています。

前を向けば、黒いビロードの空に星の数はどんどん増えていって、まるで銀色の光の海です。

大きな船には、甲板いっぱいにおおぜいの乗客がいました。

大人たちはこれが現実のことではない、夢の出来事だと知っています。自分たちがこうして夢を見ている意味も。

子どもたちは、光を当てたサファイアのような地球と、見たことのない無数の星のきらめきに目を丸くして喜んでいます。

でも、お父さんお母さんといっしょの子どもはよいのですが、お父さんお母さんとはぐれて、ひとりぼっちでいる子どももいます。

彼は不安そうにきよろきよろし、お父さんお母さんを捜しました

が見つからず、寂しくてしくしく泣き出しました。

自分たちの子どもを捜していた若い夫婦がそれを見つけて声を掛けてあげました。

「お父さんお母さんがいないのかい？　だいじょうぶだよ、わたしたちが一緒にいてあげるからね。この船に乗っていないのは、きつと、いいことなんだよ」

と、自分たちにも言い聞かせるように言いました。

子どもはたずねました。

「この船はどこに行くの？」

「きつと、いい所だよ」

「ほんとう？　それじゃあお父さんお母さんは乗れなくてかわいそうだね？」

若い夫婦は可笑しいのか悲しいのか分からない複雑な顔をしました。

「君のお父さんお母さんも、いずれ、もつとずつと後の船に乗ってくるよ」

「あーあ、お父さんお母さんと同じ船がよかったなあ」

「いや、この船はきつと特別に豪華なんだよ。お父さんお母さんはもつと小さな普通の船で、別々に乗ってこなくてはならないと思う

よ？」

「ふうん。じゃあ僕は運が良かったんだね？」

「うん……、そう……なのかな……」

若い夫婦は額を寄せ合ってそっと涙を流しました。

船はぐんぐん進んでいき、青い宝石の地球は、どんどん小さくなっていきます。

乗客たちの、長い船旅の始まりです。

その2 大きな流れ

遠ざかっていく地球に、

「ああ嫌だ、俺は帰りたい！」

と、どうしても戻りたい人が救命ボートを下ろす準備を始めました。すると「俺も」「わたしも」と急いで手伝う人たちが現れました。

彼らはボートに乗り込み、真っ黒な宇宙に下りました。

必死にオールを動かして地球に向かおうとします。

しかし、何もないと思っていたボートの周りに、銀色の水切り波が現れ、地球から外へ向かって大きな流れのあることが分かりました。

ボートの乗員たちは一生懸命オールで流れをかきましたが、流れはとても大きく、進むどころかどんどん押し流されていきます。

「ああ嫌だ、俺の家が遠ざかっていく！」

我慢できない人が流れに飛び込んで泳ぎだしました。

ボートは2艘、3艘、4艘と、続々宇宙の海に下りて、一生懸命地球に帰ろうとしました。

流れに飛び込む人もたくさんいます。

しかしどんなにこいでも、泳いでも、流れをさかのぼることは出来ず、泳ぐ人は泳ぐのをやめ、ボートをこぐ人はこぐのをやめ、皆とても辛そうな顔で遠ざかっていく地球を眺めました。

ほとんどの人が諦めてしまいましたが、決して諦めずに頑張って泳ぎ続ける人もいます。

彼らは、頑張って、頑張って、力つきてしまったのでしょうか、真っ黒で透明な流れの中に姿が消えていき、いなくなってしまうました。

彼らが無事地球に泳ぎ着けたことを祈りましょう。

その3 遭難者

救命ボートはみんな元の船に戻りました。

ところがもう一艘、先の方で救命ボートが漂っていて、豪華客船が近づいてくると一人乗っていた女の人がおーいおーいと手を振って助けを求めました。

大人たちが協力して縄ばしごを下ろし、女の人を甲板に引き上げてやりました。

昔の映画女優みたいに綺麗な人です。

「ああ、ありがとうございます。おかげで助かりました」

と女優さんはお礼を言いましたが、頭がくらくらしているようでふらふらしていました。

子どもが

「お姉さん、だれ？」

とききました。女優さんは、

「はて？ わたしはいったい誰でしょう？」

と、とんちんかんなことを言っつて首をかしげましたが、うーんうーんと一生懸命考えて、ますます頭がくらくらしてきたようです。目を回して、「あらそうだわ！」と嬉しそうに何かひらめきました。

「わたしはクララよ。天海（あまみ）くらら。よろしくね？」

と、これで「安心」というようにニッコリ笑ってお辞儀しました。
変なお姉さんです。

その4 返し波

地球が後ろに離れていき、銀色の月がまん丸く、大きく近づいてきました。

すると、その輝きの中から大きな波が現れて向かってきました。

波はとても大きく、大きな豪華客船を進ませないほど大きく、船は立ち往生しました。

船の先で波しぶきが弾け飛びます。

甲板にいる人に波のしぶきがかかると、しぶきのかかった人はなんだかとても悲しい気分になってしまいました。

しぶきのかかった子どもはえんえんわんわんと泣き出しました。

子どもたちが泣き出すと大人たちもシクシクと涙をこぼし、とうとう耐えきれずに子どもたちと一緒にって声を上げて泣き出しました。

ああ悲しい。悲しくて悲しくて、身が引きちぎられそうだ。

乗客たちが泣き叫ぶと、波は船の周りでぐるぐる渦を巻きだし、渦はどんどん大きくなり、船は大渦の中へ下りていきました。

渦は泣き叫ぶ声にどんどん巨大になっていき、その尖った底はどんどん深くなっていき、真っ暗な水底に、真っ赤に煮えたぎるマグマが見えてきて、カッカと船を照らしました。

恐ろしい熱を感じて乗客たちは悲鳴を上げました。

渦の壁の向こうには、ぼろぼろの難破船が骸骨たちを乗せて、骸骨たちは新しい仲間を歓迎してカタカタと踊りました。

船はどんどん渦の底に向かって落ち込んでいきます。ああこのままではこの船も本当にあの幽霊船の仲間になってしまいます。

その5 トロイメライ

船の中からポロン、ポロン、とピアノの音が聞こえてきました。

とても優しく、幸せな、眠くなってしまうような曲です。

でも演奏はとても下手くそなので調子が狂って眠れません。

誰か曲を知っている人が

「トロイメライだ」

と言いました。

船内への階段に近い人たちが誰が弾いているのか見に行きました。

この豪華客船には大粒のダイヤがいつぱいぶら下がったシャンデリアの大ホールがありますが、そこでピアノを弾いているのはボートで漂っていた映画女優のお姉さん、天海クララさんです。

ピアノが下手くそなクララさんは、どうやらそれしか弾けないように、「トロイメライ」をくり返しました。

あんまり下手くそなので、音楽を勉強していた大学生のお姉さんが代わって弾きました。

ポロンポロン、ポロンポロン、

ポロンポロン、ポロンポロン、

ああ、とても優しく幸せな音楽です。

ホールに下りた人たちはダイヤモンドの輝きの中にそれぞれの懐かしい思い出を映し出し、とても悲しいけれど、嬉しい、優しい気持ちになりました。

船の外でも、渦の中心の上に銀色のミラーボールが浮かび、キラキラ輝いて、やはり乗客たちは自分の思い出を映し出し、懐かしがりました。

乗客たちの泣き叫ぶ声が消え、優しい気持ちが増えると、ミラーボールは上昇を始め、船はそれに引っ張り上げられるように渦をさかのぼり始め、とうとう、外へ脱出することが出来ました。

渦が消えると、月から押し寄せていた悲しみの大波もやんでいました。

大きな銀色の月が、とても綺麗です。

船が大渦を脱出するとき上がった波のしぶきがたくさんの泡になって後ろへ、地球へ向かって流れていきます。

あの中には船に乗る人たちの故郷への懐かしい思いがたくさん詰まっています。

地球に残る人たちにも行く人たちの優しい感謝の心が届くことを祈りましょう。

その6 港

豪華客船は月を越え、更に向こうへ進みます。

大ホールのステージにはピアノのお姉さんの他にもヴァイオリンやチェロやフルートを演奏できる人たちが加わってちょっとしたコンサートになっています。

リストの「愛の夢」や

ショパンの「別れの曲」

アルビノーニのアダージョ

バッハのG線上のアリアなど、

誰でも聞いたことのある有名な曲の中でもやはり静かな、ちょっと悲しく、悲しさをそっと包み込んでくれるような曲が演奏され、たくさんの人たちがしみじみと聴き入っています。

ちょっと寂しくなりすぎたのでモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」が演奏されました。

小さな子どもたちも知っているメロディーに大喜びしていつしよに歌い出したので、楽団員は笑顔でうなずきあつて「きらきら星変奏曲」を続けて演奏しました。

外では、甲板の人たちが前方を指さして騒ぎ出しました。

星がいっぱい集まって、

砂浜のように広がっています。

船はそこへ向かっていき、少し沖で横を向いて止まりました。

星の砂浜の向こうには、何もない野原に、ぽつぽつと、小さな家だけがまばらに建っていました。

なんだかとても寂しい所です。

船はずっと止まったまま動き出そうとしません。

ホールで音楽を楽しんでいた人たちも甲板に上がってきて陸地を眺めました。

さわさわと落ち着かない空気の中で、何人かが「ボートで下りてみようか？」と言いました。

でも彼らはいったん砂浜に下りてしまったらこの客船には戻ってこれられないように思っ、なかなか勇気が出ませんでした。

なんだかこの場所で下りてしまうと、その後でとてもたいへんな思いをしなければならぬ気がします。

しかし振り返るとお月様は綺麗で、その向こうに、小さいですが、青く輝く地球が見えます。

ここから先に行ってしまったら、もうあの地球は見えなくなってしまうでしょう。

少しでも自分たちのいた世界に近い所にいたい人たちが、勇気を
出して救命ボートに乗り込み、海面に下ろされました。

救命ボートは波に招かれ、砂浜に滑り込みました。

砂浜に降り立った人たちは、その向こうの野原へ歩いていき、姿
が見えなくなりました。

彼らがこの大地で立派な家やビルを建てて素晴らしい社会を築い
ていくのを祈りましょう。

船は沖を進みだし、次の港に向かいます。

その7 夫の川の外れ

船は次の島、次の島へと進んでいきました。

それぞれの島で、ここが自分の生きる場所だと思った人たちが救命ボートに乗って砂浜へ上陸しました。

島は訪れるたびどんどん建物が増えて、立派になっていきました。

綺麗な町並みが築かれ、大きな遊園地が出来て、子どもたちは大喜びでお父さんお母さん、子どもによつてはお祖父ちゃんお祖母ちゃん、お兄さんお姉さんの手を引いてボートに乗りたがりました。

お兄さんお姉さんが考え込んでいると待ちきれないで一人でボートに乗り込んでしまう子どももいました。

お兄さんお姉さんと離れてしまっても、一緒に島に向かう仲間がたくさんいるので平気でしょう。

島へ向かう人たちは、子どもも大人も、みんな希望に顔を明るく輝かせています。

ボートの乗員が島に上陸して町並みに入り込んでしまうと、客船の乗客にはその姿が分からなくなり、彼らの新しい生活を祝福しながら、船は次の島へ向かうのでした。

たくさんあった救命ボートですが、とうとう最後の一つになって

しまいました。

乗客の数もだいぶ減って、ホールで演奏していたお姉さんたちも途中の島に下りてしまい、船内はすっかり静かに、寂しくなっていました。

眩しい夏の日を浴びた海のきらめきのようだった無数の星々も、向かう先には数がうんと減って、真っ暗な宇宙が広がるばかりです。

星の海に浮かぶ、おそらく最後の島に到着しました。

ここはもう乗客の見知っている街の景色ではなく、つるんとした、お菓子の飴で出来たような不思議なビルがたくさん建った、未来都市でした。

船に残っていたほとんどの乗客がボートに乗りました。大きなボートなのでまだ余裕がありましたが、数人が船に残るつもりのもので、見送る側に回りました。

途中で乗ってきた映画女優のクララさんが残ろうとする乗客たちに言いました。

「下りないんですか？ この先にはもう人間の住む島はありませんよ？」

残ろうとする数人の中にはお父さんお母さんとはぐれてしまった子どもの姿がありました。この子に優しく話し掛けてくれた若い夫婦は3番目の島で心残りそうにしながら下りていきました。

「この先にはなんにもないの？」

クララさんはうなずきました。

「なんにも。あるのは、光だけです」

最後のボートは、ほんの数人を残し、最後の島へ招かれていきました。

彼らが生きる社会が平和で、慈愛に満ちた素晴らしい未来であることを祈りましょう。

船は、天の川銀河を離れ、外の宇宙へ進んでいきます。

その8 赤いバイキング船

大きな豪華客船は真っ暗な何もない宇宙に自分の明かりを寂しく浮かべながら進んでいきます。

子どもはクララさんにききました。

「この船と僕たちはどうなるの？」

大人たちもクララさんの答えを聞きたがりました。

「宇宙はとても広いのです。次の銀河に到着するため、この船も今ぐんぐんスピードを上げて光の速さに近づいています。

光には形がありません。

わたしたちは一つになって、わたしたち自身が一つの星になるのです。

光は広がり続ける宇宙の一番端っこなのです。

わたしたちは自分の世界を離れて遠くへ、遠くへ、離れていつていますが、実は遠くへ離れながら時間をさかのぼっているのです。

今見えてきた次の銀河、アンドロメダ銀河は、わたしたちの過去なのです。

わたしたちはあの星の一員になって、同胞たちの行く末を見守るのです」

クララさんの説明を聞いた大人たちは青くなって慌てました。

「冗談じゃない、そんなのは嫌だ！

ああ、そんなことならもつとうんと早く船を下りておくんだった！

ああ、俺はなんて馬鹿なことをしてしまったんだろう！

ねえあなた、なんとかならないか？

なんとか元の世界に帰ることは出来ないのか？」

すっかり後悔して泣きつく彼らにクララさんは言いました。

「本気で帰りたいのなら、あれに乗るしかありませんよ？」

クララさんが指さす先、まだまだ遠くに凶鑑で見るような真ん中の膨らんだ円盤のような姿をしたアンドロメダ銀河を背に、赤い光が近づいてきました。

それは船首にフェニックスを載せた、真っ赤に燃えるバイキングの船でした。

クララさんの目が赤く光り、髪の毛が真っ赤な炎となって燃え上がり、怖い顔をした仏様の仲間の仏像のような姿になりました。

「さあ！ 過去に帰りたい者はあの船に乗り移れ！ ただし、無事
帰り着ける保証はないぞ？」

これは運命との闘いだ！

なにがなんでも生き抜く炎の心を持たない者はここで大人しく光
となるがいい！」

クララさんの変身した恐ろしい姿を見た大人はすっかり怖じ気づ
いてしまいましたが、何人かは勇気を振り絞り、「よーし！」と
客船の隣に横付けされたバイキング船に炎を飛び越えて乗り移りま
した。

「よーし。では締め切るぞ。残りの者たちよ、さらばだ！」

クララさんは大きく手を振り、船に残る子どもに、ニコツと悪戯
っぽく微笑みかけました。

口を手を当て、こっそり教えてやりました。

「光になって星になれば、いつでも天使になって好きな場所、好き
な時間に行けるわよ？」

バイバイと手を振って阿修羅のクララさんも真っ赤に燃えるバ
イキング船に飛び移りました。

「さあ！皆の者！ 命懸けで運命に立ち向かえ！ しゅっぱーっ！」

その9 赤い流れ星

客船から乗り移った人たちは細長い船体に縦に並び、左右のオールを掴みました。

「オーエス！ オーエス！」

先頭に立つ阿修羅の掛け声に合わせて一斉にオールを漕ぎます。

救命ボートでは立ち向かえなかった大きな流れを切り裂いて、炎のバイキング船は天の川銀河向かって突き進みました。

船首のフェニックスが翼を広げ、「ケーン！、ケーン！」と甲高い声で鋭く鳴きました。

「オーエス！ オーエス！」

阿修羅の掛け声に、

「オーエス！ オーエス！」

運命に挑む者たちも声を上げ、力いっぱい重いオールを漕ぎました。

汗が噴き出し、それは炎となって体に巻き付き、彼らの姿もクラさんのような阿修羅に変身していきました。

オーエス！ オーエス！

バイキング船は快調に天の川銀河に漕ぎ入りました。

オーエス！ オーエス！

星々のきらめきが線になって後ろへ流れていきます。

オーエス！ オーエス！

大型客船で立ち寄ってきた宇宙島を追い越していきます。

オーエス！ オーエス！

猛烈な勢いで突き進む炎のバイキング船は、ああ、とうとう月に近づき、その向こうに青い地球が見えてきました。

オーエス！ オーエス！

バイキング船は喜び勇んでますます激しく速度を上げていきます。

オーエス！ オーエス！

しかし、月を過ぎると地球から大きな激しい波が襲ってきました。

波はバイキング船を飲み込み、黒々とした渦を巻き、バイキング船を真つ二つに叩き割り、さらに引き裂こうとしました。

わあつと総崩れになる船員たちに阿修羅は命令しました。

「ゴールは間近ぞ！ なにがなんでもたどり着け！ 自分の力で戦い抜け！」

船はもうバラバラで、人間はそれぞれが船体の割れたボードに必死にしがみつき、自分で水をかき、大波に挑んでいきました。その波の向こうに見えるふるさとに帰るために。

真っ赤に光る流れ星が、地球に向かって下りていきます。

あるいはバラバラに弾け飛び、あるいは途中で燃え尽き、彼らの内いくつが地表にたどり着けるか。

戦う彼らが、一人でも多く運命に打ち勝つよう、祈りましょう。

その10 星

アンドロメダ銀河に至った船は、星となり、その形を無くしました。

しかし星から放たれた光は、遠いふるさとの宇宙を目指し、時間をさかのぼり、自由に人々の営みを眺めることが出来ました。

地上に暮らす人々が、天に瞬く輝きに気づくのでしょうか？

心は自由に空間を、時間を超えて、広がります。

その時、その場所に営まれる喜びも、悲しみも、心は自由に駆けめぐり、

確かにそこにあつた人々を、

永遠に忘れることなく、

見つめ続けるのです。

愛しさと懐かしさの眼差しで。

過去から未来へ、また過去へ未来へ、

時は一つの輪になり、この宇宙を成しています。

宇宙という一つの輪の中に、全てはあるのです。

失われたものも、実は、何一つ無くなっているわけではないのです。

生まれてしまった悲しみも、やがて愛しさに変わり、

新しい命へと注がれます。

ただ、今は、

心を込めて静かに祈りましょう。

生きている者も、かつて生きていた者も、

全ての魂に平穏のあることを。

祈りましょう。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932r/>

キラキラレクイエム

2011年10月4日12時16分発行